震災復興現地レポート Vol.22

震災から８年、ラグビーW杯2019日本大会開催とＪＡいわて花巻・沿岸部における農業・地域復興の現状

調査研究部　震災復興調査班
（文責：研究員　上田　晶子）

目　次

１．はじめに
２．復興進む沿岸部の現状
３．新たな特産の誕生
４．ＪＡのフードドライブ：子ども食堂への食料品提供
５．地域コミュニティを行政とともにつくる
６．インタビューを終えて

１．はじめに

東日本大震災時、岩手県は地震に加え、沿岸部を中心に津波による甚大な被害が出ました。震災から８年半が経ち、沿岸部では堤防の整備や整地化が進み、内陸と沿岸部を結ぶ高速道路の完成や鉄道の再開が地域の復興を後押ししています。津波で全壊した学校跡地に建設された「釜石鵜住居復興スタジアム」がラグビーワールドカップ2019日本大会（以下、ラグビーW杯）の開催地の一つに決まり、地元・釜石市や大槌町では特産品の開発など大会を盛り上げる機運が高まりました。

これまで本誌№146（2016年８月）と№153（2017年10月）では、ＪＡいわて花巻管内の沿岸部において、交通網の復活とラグビーW杯の地元開催が震災復興の弾みとなると期待されてきたことを伝えてきました。

本稿ではまず、ラグビーW杯会場周辺などに飾った青系花卉「花巻ブルー」のブランド化や、ＪＡ農産物直売所などで取り扱ったラグビーボール型カボチャの販促など生産現場の挑戦を紹介します。そして、地域コミュニティの再編のため住民が有志で取り組んでいる子ども食堂にＪＡ職員や利用者が初めて食材提供をした経緯や狙いについても報告いたします。

２．復興進む沿岸部の現状

⑴　交通網復活、ラグビーW杯開催と地域復興

2019年３月には岩手県大船渡市の盛（さかり）駅と久慈市の久慈駅を結ぶ第三セクターの三陸鉄道リアス線が８年ぶりに全線開通[1]し、復興を強く印象付けた。再開に合わせ鵜住居駅前には東日本大震災の記憶や教訓を伝える施設「いのちをつなぐ未来館」や、「備える」「逃げる」「戻らない」「語り継ぐ」の４つの教訓が刻まれた慰霊碑「釜石祈りのパーク」を含む複合施設「うのすまい・トモス」が誕生した。震災を経験した20代の若者が記憶を語り継ぎ[2]、市民が防災を学ぶ場となっている。

ラグビーW杯に向け、急ピッチで工事が進

1　2019年10月12・13日に東海、関東甲信、東北地方を襲った台風19号の影響で、土砂の流入や法面崩壊が相次ぎ、全線163kmのうち約７割が不通となっている。
2　「いのちをつなぐ未来館」では、震災当時中学生だった菊池のどかさんが、震災の経験を話す「語り部」として防災教育の重要性を伝えている。

岩手県・ＪＡいわて花巻管内と沿岸部　地域概要

んでいた三陸沿岸道路は６月、宮城県境から釜石、宮古までがつながり、大槌インターチェンジ（ＩＣ）も完成した。内陸の花巻と沿岸部の釜石の80kmを結ぶ東北横断自動車道釜石秋田線も３月に開通したことで、車で２時間近くかかっていた移動時間が30分以上短縮され、観光客の利便性が高まり、物流も円滑になった。その結果、９月25日には、東北唯一の試合会場となった釜石鵜住居復興スタジアムに国内外から多くの観客が訪れた[3]。

⑵　大槌ＩＣ開通が「母ちゃんハウスだぁすこ沿岸店」に与えた影響

大槌町のＪＡ産直「母ちゃんハウスだぁすこ沿岸店」（以下、「だぁすこ沿岸店」）では、2016年１月のオープンから３年半が経過し、来場者数は約30万人に上る。新鮮な地場野菜や果物のほか、水産の町にふさわしく鮮魚・水産加工品コーナーが併設され、これらを目当てに、多い時は１日300～400人が来店する。2018年までは震災発生日の３月11日に関連したイベントを毎月11日に企画してきたが、2019年からは休日に合わせ、新たに毎月第２日曜日を感謝デーに定め、さらに集客を伸ばしてきた。

「だぁすこ沿岸店」は開店以後、直売と食堂、移動販売を通じて、地域農業の振興のみならず、地域住民のくらしの拠り所としての存在感を高めてきた。

2019年６月には店舗のすぐ正面に三陸沿岸道路の大槌ＩＣが開通したことで利便性は高まり、店舗運営にも変化が出ている。震災当時はＪＡ大槌支店長として復旧に尽力し、2017年３月から「だぁすこ沿岸店」の店長を務める阿部成子さんは、「町外の買い物客が増え、店舗が生産者から集荷できる農産物も増えた」と交通網復活の効果を実感する。

これまでは釜石市と大槌町の出荷者が主で

3　釜石鵜住居復興スタジアムでは、９月25日のフィジー対ウルグアイ戦と、10月13日のナミビア対カナダ戦の２試合を予定していた。９月25日の観客数は14,025人、試合前には震災犠牲者に黙祷が捧げられた。10月13日の試合は台風19号の影響で中止となったが、両チームの選手・スタッフが災害ボランティアとして活動したことも注目され、話題となった。

あったが、三陸沿岸道路が開通したことで隣接の遠野市などからの出荷者も増え、2019年の登録出荷組合員は111人である。店側もＪＡ本店がある内陸部の花巻市からリンゴなど新たな食材を調達することができ、「交通の復活は集客だけでなく、だぁすこ沿岸店の品ぞろえ強化にもつながっている」（阿部店長）と受け止める。

３．新たな特産の誕生

⑴　「花巻ブルー」のブランド化と、さらなる認知度向上の取組み

震災以降、新たな特産品の開発や農産物のブランド化を推進する動きが活発になっている。年間を通じて切り花や鉢物まで数々の花を生産するＪＡいわて花巻管内では、2015年から管内で生産する青系の花卉を「花巻ブルー」と名づけ、ＪＡと関係団体、行政が連携してブランド化を進める動きが加速している。中でも2015年秋にＪＡオリジナル商品としてデビューした鉢植えリンドウ「花巻銀河ブルー」は関東を中心に全国的に販路を広げ、2019年の販売量は約３万鉢と４年で約10倍に伸びている。従来のリンドウにはない、光沢のある濃い青色と大きく開く花びらなどの特徴に加え、花巻出身の作家・宮沢賢治の童話の世界観に合わせた個性的なネーミングがブランドの印象を後押しする。

「花巻銀河ブルー」は震災の翌年、2012年に愛知県の市場関係者の紹介で埼玉県内の種苗家からＪＡ鉢花生産部会員が譲り受け、有志が花巻市内での試験栽培を始めた。ブランド化に尽力したＪＡ鉢花生産部会の佐藤巧部会長は当時を振り返り、「関東とは異なる気候に苦戦し、導入から３年は栽培確立に向け試行錯誤の連続だった」と明かす。元々、花巻市を中心に管内の鉢物リンドウの栽培は30年以上続いており、「いわて乙女」を主力品種として９月の敬老の日の需要期を焦点に売り込んでいた。「花巻銀河ブルー」の出荷開始は10月と「いわて乙女」より遅めだが、ＪＡ園芸販売課は同時期に競合品種がないこと、「いわて乙女」からのリレー出荷で長く販売ができることを強みとしてアピールする。

「花巻銀河ブルー」などのリンドウを栽培するＪＡいわて花巻 鉢花生産部会 佐藤巧部会長

部会では品質向上のため月１回、生産者が互いの園地を回り勉強会を開く他、花の開花状態や鉢の高さなどの厳しい出荷基準を定め、条件を満たしたＡ品のみを販売しブランド価値を高めている。その結果、2016年には「第13回国際フラワーEXPO[4]・IFEXフラワー大賞・鉢物部門」で優秀賞を獲得、続く鉢物の商談会「JFIトレードフェア2016秋 in FAJ」では人気投票１位となり、花屋や市場から「リンドウ界の革命」との評価を受けた。

販売は全量がＪＡを通じた契約市場との受注栽培のため、販売価格が事前に決まり、生産者の手取りも安定する。そのため、現在部会員の６割が「花巻銀河ブルー」を栽培し、2015年に３人で初めた栽培は2019年に10人に増えた。独自の販売ルートに魅力を感じた20代の後継者も部会に戻り、一度はリンドウの栽培をやめた花卉農家が栽培を再開し、産地

4　花卉に関わる小売業者、卸売業者、生産者、さまざまなビジネスユーザーが参集する展示会。現在は国際フラワー＆プランツEXPO（通称IFEX）に改称。

道の駅「釜石仙人峠」を彩る「花巻銀河ブルー」の鉢植え

化に向けて地域に活気が出てきている。

ＪＡが販売する「花巻ブルー」シリーズはＪＡが商標登録した「花巻銀河ブルー」の他に、春のクレマチス、夏のカンパニュラ、秋の切り花リンドウなどを認定している。2019年秋には三重県の個人育苗家が育てた八重咲リンドウを新たに「蒼孔雀（あおくじゃく）」と名付けて商品化した。花びらの数が多い八重咲リンドウは他産地にはなく、部会の販売意欲は以前にも増している。ＪＡ園芸販売課は今後、鉢植えの品種を切り花で作るなどしてバリエーションを増やし、通年で管内の花を「花巻ブルー」として全国に普及したい考えだ。

ＪＡや行政が「花巻ブルー」を地域住民との交流ツールに活用するイベントも相次いでいる。震災復興支援を目的に花巻～釜石間を運行する蒸気機関車「ＳＬ銀河」では、2015年から毎月１回、花卉生産者とＪＡ職員が乗車し、花巻ブルーの鉢花や切り花を乗客にプレゼントしている。他にも母の日に合わせ、市の園芸振興部会との共同販売や５月の大型連休に花巻市内のホテルでクレマチスを約30鉢展示したフォトスポットを設置するなど、SNSを活用した販促も進めてきた。

ラグビーW杯開催に合わせ、ＪＡ鉢花生産部会はいわて花と緑の普及協議会と連携し、釜石鵜住居復興スタジアム周辺やＪＲ釜石駅ロータリー、道の駅「釜石仙人峠」の店舗前に「花巻銀河ブルー」を使った鉢植えを飾り、道行く人々の目を楽しませた。鉢植えは大会前の９月初めに、ＪＡ職員と花卉生産者と釜石市内の園児たちが花育活動の一環で作った作品で、「花巻ブルー」の美しさが大会を11月初旬の終盤まで盛り上げた。

2019年はブランド化５年目になり、ＪＡだけでなく行政もＰＲ費用や種苗代の助成などで産地支援策を打ち出し、認知度向上に向け、地域一帯で盛り上げムードを高めている。

⑵　ラグビーボール型カボチャで地域農業を盛りあげる

ラグビーW杯の試合会場、釜石鵜住居復興スタジアムから車で約10分の距離にある「だぁすこ沿岸店」では、９月から11月の大会開催期間中にラグビーボールの果形をした食用カボチャを販売した。農業で大会を盛り上げようとＪＡ東部地区営農センターが釜石市と大槌町周辺の農家に呼びかけ、３年ほど前から試験栽培を重ねてきた。品種は皮が緑色で果肉がオレンジ色の「ロロン」と、皮が白く果肉が黄色の「白栗」の２種類で、2019年は管内の野菜農家９戸が栽培に挑戦した。

一般的なカボチャより糖度が高く、ほくほくした食感が特徴の「白栗」を５ａ（アール）栽培するＪＡ遠野地域野菜生産部会有機野菜専門部長の阿部美智子さんは、加工需要も含めラグビーボール型カボチャの販路拡大に期待する。大会期間中は「だぁすこ沿岸店」や地元スーパーに出すカボチャに、釜石市が大会を記念して作成した「ラグビーボールかぼちゃ釜石・大槌」のシールを貼り、地元開催をアピールした。１玉２kgと一般的なカボチャより大玉だが、売価は１玉400円前後と消費者が手に取りやすい価格帯を意識した。また「だぁすこ沿岸店」内の食堂でもラグビーボール型カボチャを使った惣菜が登場し、食堂の職員

ラグビーボール型カボチャ（白栗）を栽培する
ＪＡいわて花巻　遠野地域野菜生産部会
有機野菜専門部 阿部美智子部長（写真右）と、
東部地区営農センター 営農指導係 澤山宣輝氏

からも食味の良さが好評である。

長期保存が利くカボチャは沿岸部の生産者にとって新たな栽培品目として注目されつつある。阿部さんは「カボチャは他の野菜より防除など作業の手間が少ない上、収量も良いので農家の栽培に利点が多い」と期待する。販路拡大に向け、ＪＡ東部地区営農センターの営農指導係、澤山宣輝さんは「地元の加工業者と連携を呼び掛け、カボチャコロッケなどへの商品展開ができれば、活用の幅が広がるだろう」と構想している。

ＪＡでは、漁業が中心だった沿岸部において、震災以降パイプハウスの補助策などを打ち出し、ピーマンなどの野菜栽培を強化してきた。しかし震災から８年半が過ぎ、沿岸部ではインフラが回復する一方で、一度地域を離れた住民が戻らず、農業分野も担い手不足や耕作放棄地の増加といった問題にも直面している。

大槌町の農事組合法人大槌結ゆい代表理事で、ＪＡ理事でもある佐々木重吾さんは、水稲を中心に沿岸部の農業の担い手不足を指摘する。佐々木さん自身も専業農家として、酒米など水稲中心の経営から、ピーマンの栽培を拡大している。ハウスと露地栽培を合わせて18ａ生産しているが、再来年には30ａに拡大したい考えだ。担い手については、兼業農家や若者の参加を見据え「何十年もの長いスパンで担っていける人たちを育てることが大事」と力を込める。

ＪＡ大槌支店の二本松靖支店長は「だぁすこ沿岸店」に地域農業の情報発信拠点としての役割が期待されると考えている。そして「行政も農業サイドを一生懸命支援してくれるので、ＪＡと行政が一体になって、農業者の生産意欲と生産量、所得を上げる努力が一番求められている」と強調する。

４．ＪＡのフードドライブ：子ども食堂への食料品提供

ＪＡは2019年７月の国際協同組合デーに合わせ、大槌町にある「おおつち子ども食堂」にＪＡ職員や「だぁすこ沿岸店」の利用者から集めた米や調味料、菓子などの食料品を無償提供した。ＪＡいわてグループが統一活動として始めた「フードドライブ」[5]の取組みについて、ＪＡが独自に管内の子ども食堂への食料品提供を実施したものである。

提供する食品はＪＡ本店の組織広報課が６月下旬にチラシで職員らに参加を呼びかけた。これに呼応し、ＪＡ本店と大槌支店の職員と組合員、「だぁすこ沿岸店」の利用者が協力し、菓子類やＡコープ商品、調味料など保存可能な食料品が段ボール箱４箱分集まった。７月４日にＪＡ大槌支店の二本松支店長と本店組織広報課の山本来未（くるみ）さんがＪＡを代表して「おおつち子ども食堂」が開催される特定非営利活動法人ワーカーズコープ大槌地域福祉事業所[6]・地域共生ホーム「ねまれや」

5　家庭で余っている食料品を学校や職場に持ち寄り、まとめて福祉団体や施設、フードバンク等に寄付する活動のこと。
6　ワーカーズコープ大槌地域福祉事業所は「おおつち子ども食堂」の事務局としての役割と場所の提供を行っている。子ども食堂は地域の方も会員となる「おおつち子ども食堂有志の会」が運営している。

に届けると、子どもたちは笑顔で出迎えた。

食農・食育担当でもある山本さんは「初めての試みでＪＡ内部への周知も不十分だったが、主婦層の職員が中心となり協力してくれた。今後はＪＡ女性部なども巻き込んで、規格外の野菜を料理して食事を出すような試みもできれば嬉しい」と、今後のビジョンを語る。

近年全国で急増する子ども食堂だが、実施団体により受け入れの対象者や理念、運営方法などは様々だ。今回ＪＡがパートナーに選んだ「おおつち子ども食堂」とは初めての関わりだった。ＪＡの広報担当として管内の情報を発信する組織広報課の佐藤拓也さんは「ＪＡとして大事な取組みだと思う。地域の人たちと協同の輪を広げていきたい」と、実施団体とさらに連携を図ることを強調した。

「おおつち子ども食堂」の活動理念は「子どもたちに家庭や学校とは違うもう一つの居場所をつくること」である。2016年４月から毎月１回（不定）の10時から14時まで「ねまれや」内で開催し、多い時は50人以上が集まる。中高生までは無料で食事とデザートが出る。子どもたちに人気のメニューはカツ丼や鶏肉のフライなどの肉料理とのこと。付添の親や地域住民は１食300円で参加でき、子どもたちとともに食卓を囲む。活動に賛同した有志が運営し、毎月の開催を支えるのは企業や地元住民からの食料品の寄付や支援、補助金だ。

「おおつち子ども食堂有志の会」代表で、大槌地域福祉事業所の所長を務める東梅（とうばい）麻奈美さんは「地元ＪＡが活動に興味を持ち、協力してもらえるのは心強い」と新たなつながりに期待する。ＪＡが食料品を提供して以来、ＪＡ大槌支店の二本松支店長からピーマンが届くなどの交流を通じて、関係が深まった。

「ねまれや」のはじまりは、2013年の冬季休暇中に小学生を一時的に預かるデイサービス「ぽこあぽこ」である。開始後、地域住民から土曜日や放課後も子どもを預かってほしいとの要望が上がり、2016年に共生ホーム「ねまれや」として木造２階建ての建物を新設し、介護・学童・障がい者のサービスを一つの拠点で支える体制を整えた。今ではデイサービス、学童保育、障がいのある子どもの日中一時支援、震災で家族が離れ離れになり孤立しがちな高齢者が集まる「お茶っこサロン」、菓子工房、買い物手段のない高齢者のための買い物ツアー、子ども食堂など、地域の困りごとに応える形で活動を広げている。

地域共生ホーム「ねまれや」（大槌町）にて、寄贈された食料品を受け取り、喜ぶ子どもたち（写真提供：ＪＡいわて花巻）

「ねまれや」とは大槌の言葉で「休んでいって」という意味である。子どもだけでなく、高齢者が安心して暮らせるまちづくり、地域資源を活かした復興のありかたを模索し、仕事おこしやまちづくりに取り組んでいる。

子ども食堂ではハロウィンなど季節のイベントと一体化した企画を打ち出し、普段施設を利用していない地域の子どもも参加しやすいよう工夫した。有志として食堂運営に協力する多田左衛子（たださえこ）さんは、「子ども食堂は単に食事を提供する場所ではなく、施設内では子どもたちが食事の準備を手伝える環境づくりや参加者同士の交流を大事にしている」と明かす。

「ねまれや」が主体となり子ども食堂に地域一体で取り組んできた結果、子どもたちに変化が生まれている。取組み当初は野菜を全く食べなかった子どもが野菜を食べられるよ

うになったり、成長して施設を離れた卒業生が施設に立ち寄ったりするなど、地域の居場所としての存在感が増してきている。

東梅さんは「震災から８年半が経ち、外部支援が落ち着く中、地域主体の地域づくりが必要だ」と強調する。東梅さんによれば、沿岸部では共働きや片親世帯も多く、特に放課後や長期休暇中は子どもをひとりにできないため、預かりの要望は高い。震災から時間が経過し、仮設住宅が解消されつつある今だからこそ、子どものケアや受け入れる地域コミュニティのあり方が重要と訴える。

５．地域コミュニティを行政とともにつくる

ＪＡいわて花巻は1990年代から、全国でもいち早く大規模な農産物直売所を開設し、東日本大震災後には三陸沿岸部にも農産物直売所を新設するなどの事業展開をしてきた。特に集落を基盤とした組織運営と農業振興には力を入れる。ＪＡ職員を経て2019年６月に就任した髙橋勉組合長は、農業の生産基盤の維持･拡大は地域のコミュニケーションや協同づくりがないと成り立たないと強調する。

ＪＡの組合員が41,000人のうち、正組合員22,000人、准組合員が19,000人と拮抗し、農家組合員の形も時代とともに変化してきた。「これからの農協運動は、准組合員にも地域の祭りや収穫感謝祭に参加してもらい、仲間づくりの輪に入ってもらう。その代わりにＪＡは介護や福祉で生活をサポートできますとアピールする農協運営が必要だ」と訴える。

震災から８年半が経ち、ごみ処理や整地化、堤防の整備などハード面での復興はだいぶ進んでいる。三陸沿岸道路が開通し、農産物の物流や職員の移動環境は一変し、交通網復活の効果を実感している。ただ、沿岸部の釜石市鵜住居町や大槌町では避難のために町を出て行った人々が、新たな土地での生活基盤が

ＪＡいわて花巻・髙橋勉組合長

整ったために戻らない。行政はいかに人口を維持するか、そしてＪＡも農業の担い手不足を解消するかという問題に直面している。

そのような中、生産管理を共同で行う集落営農や法人化は必須事項だと髙橋組合長は強調する。ＪＡでは震災以降新たに誕生した法人に、登記や定款作成に加え、記帳や税務処理などを通じて支援してきた。先行して発足した法人が新たに野菜の栽培を始めたり、農地集積を進めたりして実績を残し、法人化の利点が広まり意識が高まってきたとみる。

販売品取扱高240億円のうち５割が米穀を占めるＪＡ管内は水田地帯が広がり、麦や大豆への転作も盛んである。花巻市内の農地集積率は64.5％になるが、「１枚の田んぼを広くすることで作業性はさらに高まる」と髙橋組合長は明言する。ＪＡ管内では50×200mの規格を導入した地域もあり、岩手県の規格（80×125m）より長さをとることで、機械の往復する回数を減らし作業効率を高めている。青年部など若手農業者を中心に、ヘリコプターやドローンによる防除やモーターボートによる除草などに取り組み、省力化にもつなげている。

地域の担い手不足は深刻だ。そしてコミュニティの衰退に歯止めがかからない。特に漁業が中心だった沿岸部では震災で取引先を失ったり、商店が閉店したままの地域もある。「沿岸部が合併すればいいのではないかとの意見もあるかもしれないが、やはり地元感情は違

うようだ」と髙橋組合長は地域住民の心情を代弁する。そして、ＪＡとして具体的にもっと踏み込んだ支援ができるかどうかを模索している。

「農協とは何か。原点に帰ることが大切だ。ＪＡは販売・金融だけの存在ではなく、協同組合の意義を見つめ直し、くらしの活動や地域の祭りや行事を通じて地域のコミュニティを行政と一緒につくる。農地も水管理も集落単位でやっているが、最小の農家組合こそ地域を支える存在だ。今改めてその部分を農協運動の中で大事にしていくことが我々の進む道ではないか」と髙橋組合長は問いかける。

６．インタビューを終えて

東日本大震災から８年半。未曽有の大津波に見舞われた岩手県の沿岸部ではラグビーW杯開催を迎え、インフラの復旧が急ピッチで進み、復興が加速しています。世界的なイベントや交通網の回復を契機に、新たな特産品開発に乗り出すなど、ＪＡいわて花巻の挑戦は続いています。

復興はハード面の整備から、地域のコミュニティの再構築という次のステージに入りました。本稿のテーマのひとつである「フードドライブ」の取組みはその象徴といえるでしょう。農業を軸とし、地域貢献を通じて新たなコミュニティづくりを目指すＪＡと、「協同労働の協同組合」ワーカーズコープが関わった「協同組合間協同」は今後どのような展開を見せるのでしょうか。

ＪＡが食と農という切り口から、行政そして地域の様々な立場の人々と、どのようにコミュニティづくりにかかわってゆくのか、新たな可能性の萌芽が見えてきたようです。

＊本レポートは2019年10月10、11日に行った現地調査に基づいて、とりまとめたものです。

（謝辞）

大変お忙しいところを聴き取り調査にご協力いただき、資料のご提供をいただきましたＪＡいわて花巻・髙橋勉代表理事組合長はじめＪＡ役職員の皆様、ＪＡいわて花巻鉢花生産部会・佐藤巧部会長、遠野地域野菜生産部会・阿部美智子有機野菜専門部長はじめ管内生産者の皆様、特定非営利活動法人ワーカーズコープ大槌地域福祉事業所・東梅麻奈美代表、「おおつち子ども食堂」有志の会・多田左衛子氏、「いのちをつなぐ未来館」・菊池のどか氏はじめ関係者の皆様にこの場を借りて厚くお礼申しあげます。

（参考資料）

・ＪＡいわて花巻ウェブサイト
https://www.jahanamaki.or.jp/
・花巻農協鉢花生産部会Facebook
https://www.facebook.com/花巻農協鉢花生産部会－355078287932786/
・ＪＡ岩手県中央会ウェブサイト
https://www.ja-iwate.or.jp/
・大槌町社会福祉協議会ウェブサイト
http://www.otsuchi-shakyo.jp/
・子どもの居場所ネットワークいわてウェブサイト
http://kodomo-net-iwate.jp/
・うのすまい・トモスウェブサイト
https://unosumai-tomosu.jp/
・ラグビーワールドカップ2019日本大会™公式ウェブサイト
https://www.rugbyworldcup.com/

（日本農業新聞関連記事）

・「鉢花リンドウ 花巻銀河ブルー 登場 光沢で魅了 旬に出荷 ＪＡいわて花巻」2015年10月11日（日）エリア東北
・「ラグビーW杯 釜石へようこそ 県産花でお出迎え ＪＡいわて花巻など」2019年９月21日（土）ワイド１東北
・「[いわての農業人 支えるＪＡ 自己改革] 独自品種ブランドに リンドウ「花巻銀河ブルー」ＪＡいわて花巻鉢花生産部会」2019年９月28日（金）県版岩手
・「助け合い心一つに 国際協同組合デー ＪＡいわてグループ統一活動」2019年７月６日（土）ワイド１東北